

本実践・研究から見えてくること

研究協力者 鈴木 翔

(秋田大学教育文化学部 こども発達・特別支援講座)

今回行われた授業実践は、「図工室のそうじの仕方をよりよくする工夫を考える」というテーマのもとで話し合いを行い、①「議題の趣旨を焦点化する」こと、②「学級全体にとってよりよい考えをつくり出す」ができるようになることを目指して行われた。以下、目的とした2点について、考えを述べたい。

①議題の趣旨を焦点化する

「図工室のそうじの仕方をよりよくする工夫」という明確なテーマのもとで話し合いが進められたため、議題の趣旨は、はじめからある程度焦点化された状態にあり、ほとんどの児童においては、これから話し合うことを理解されていたように見受けられた。

冒頭ではじめに現在のそうじにおける、課題や改善すべきところが様々な児童からエピソードベースで提案され、それに対する反論はなかった。これは、「図工室は汚いよりはきれいな方がよい」という共通認識があったためであると思われる。ただ、「より図工室をきれいにする」方策を提案する児童と、「現実的にそれが可能なのか」という2つの視点が混同する話し合いになっていたことにより、それをまとめる司会グループの負担が大きくなっていったように思われた。両者の2つの視点が交じることは話し合いとしては問題ないと思うが、いかに司会グループの負担を少なくして、かつ学級全体の意見を取り入れるかが今後の課題になる。

②学級全体にとってよりよい考えをつくり出す

児童は自分がどの「話し合いの技」を使うことが効果的になるのかを十分に意識しており、話し合いに対してどのような貢献があるのかを常に意識して話し合いを進めていた。これは、日頃から「技」を使った話し合いを意識しているためだと推察された。また納得度メーターを効果的に使うことによって、他者の意見を聞いている児童も、話し合いにしっかりと参加できていたことは、今回の実践の重要な成果であると思われる。またこのことにより、司会者グループの負担も軽減されていた。

最後の「ふり返しカード」の項目がダブルバーレルになっている点などは、改善の余地があるように思われる。